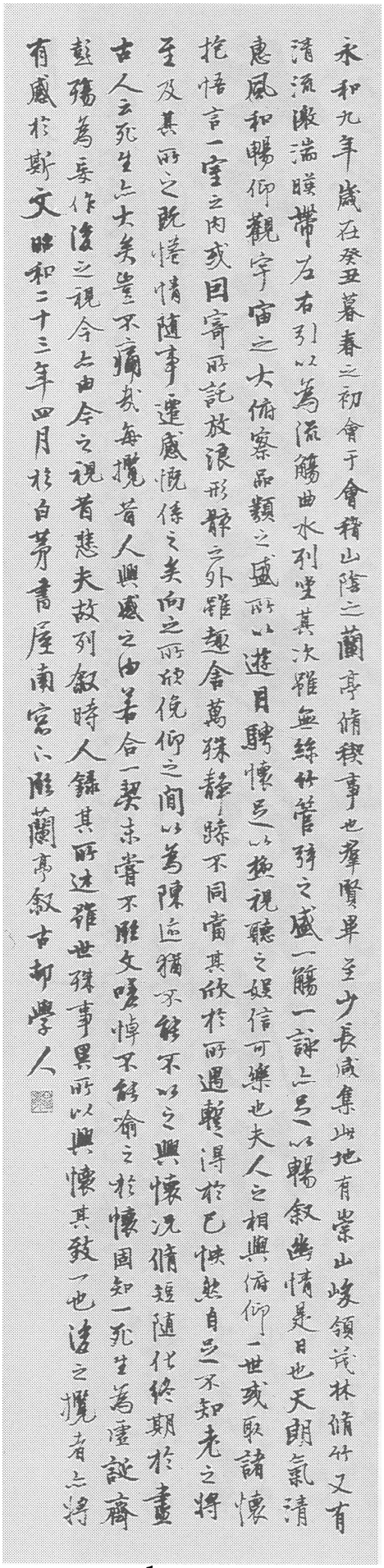
鍛錬のすすめ

平成二十七年十月二十五日　日沼古菴

前置き

鍛錬を怠る → 技量の低下 → 自責の念 → 自己肯定

資料①　田邉古邨先生臨　王羲之蘭亭序



資料②　昭和三十年　田邉古邨先生著　自由書院新社『新書道』指導書「古法帖と臨書」より

「臨書の目的は、自己の作風を建立するにある。従って、ただ数多く法帖を臨書するのみでは、本当に自己のものとすることはできない。本書は下巻においては、臨書研究の第一段階として、楷書は貫名菘翁の「中庸首章」を全巻掲載しておいた。行書は同じく菘翁の五柳先生伝を同様の仕組で掲げた。また細楷は楊大瓢の「千字文」を十分にとり、かなは伝行成筆「関戸家本古今和歌集」から相当数量を拾っておいた。すなわち漢字の臨書研究はは、まず菘翁から入門させようと言う趣旨である。それはいかに漢魏、六朝の古名筆が立派であっても、漫欠落剥した碑の拓本であったり、復刻に復刻を重ねた集帖であったりしては高等学校生徒に理解されにくいし、指導者としても、そういう拓本や集帖から基本的な用筆法を探り出すことは、困難であると思われるからである。確かなことをいえば、教師が学び取った経験のない古法帖を生徒に指導することは不可能に近い。古法帖というものは、その一つ二つを征服するだけでも容易なことではない。それを二十も三十も臨書させてみたところで、観賞教育以外に役立つものではあるまい。菘翁あたりの書は真蹟そのままの転写で、平安朝の古筆と同様墨線として十分

味わい得られるものであり、また教師も研究し易いものである。さらにその書風は、あまり偏向のない穏健なものである。なお細楷の古名蹟臨書教材として掲げた楊大瓢の「千字文」は、その筆意が何処となく王羲之一派に通じ、将来王派の名蹟を研究する基本ともなるので、一般の教科書には登場しなかったものではあるが、敢てこれを取り上げることにした。大字では菘翁を習い細字では楊大瓢を習って、それがいつしか結びつき、関戸古今のかなとも融合し、さらにそれが生徒各自の持味によっていろどられ、個性によって進展発育して行ったならば、そこに様々な書風が生まれるであろうと想像し、編者としてまことに楽しい教育的情熱がわき起こるのである。」

資料③　『書の基本』田邉古邨著

味の深い円相（下）……●四歳男子の作

これはじつにすばらしい。末筆をもう少し伸ばして円環にすると、禅僧の書く円相となります。円相はむずかしいといって、私の知人の禅僧は色紙を何十枚も書き棄てていました。こののの字を円相として見ると、じつに味の深い円相です。

第一まんまるであって、どこにも角がない。角はないけれども、コンパスで引いたように一本調子に書いたのではない。じくじくと鋒先を深く突っ込み、ところどころに筆勢を加えながら、用心深く、しかも一気に引き回している。可愛いとか、ほほえましいとかいう童書の域を超えて、憎いほどの美しさを発揮しています。おのずから頭の下る作品です。

この用筆法はいわゆる篆筆になっている。鋒先が線の芯を通り、筆鋒の全体が活躍している。したがって線が立体感をもち、深く喰い込みながら盛り上っています。起筆部のあたりがよかったせいもあろう。それが下降してゆく傾斜の度合がよかったせいもあろう。いずれにしても、これだけ慎重に書いて、旺盛な生命力を発揮するというのは容易なことではないのです。

私はこの字を手本にして何枚も臨書してみました。が、どうしてもできませんでした。なぜこの幼児にこんな巧妙なことができるのか。私は深い物思いに沈むのみです。

資料④　田邉古邨解義『書譜』より　　昭和四十三年

〈　情動形言。風騷取會之意。陽舒陰慘。本乎天地之心。〉

訓読「情働けば言に形（あら）はれ、風騷の意に取会し、陽に舒（の）び陰に慘（いた）む。天地の心に本づくを知らんや。」

意訳「情が内に動いてそれが言語に現れ、詩といふ藝術になるのであり、その情は、自然そのものの心が動くのであって、陽気に会って舒び、陰気に会って慘（いた）むのが当然である。決して人間の意思によって情が動くのではない。

さういふ実情を知らないものだから、羲之の書にいろいろの変化のあるのを見て、その各の形式を固定的に捉えてしまふ。内部から動いた変化を外部から型として観るのだから、実態を捉えることはできないのである。その表現活動の原初を辿ってゆけば、それは無心の境地であり、無意識無自覚の純粋経験の動きであり、知情意の渾然たる姿であり、したがってそれは自然の心そのまゝである。既にそれは小我であはなくて大我である。大我の発動としての変化相を捉えて、それを固定した型だと思ふのは大いなる謬である。なんで一定した型などいふものがあらうか。」

資料⑤

≪ 作品・対象（美） → 純粋経験（主客未分化） → 判断・認識（主客へ分化） ≫

≪ 思い・意志（主客が分化） → 純粋表現（主客統一） → 作品・対象（美） ≫

資料⑥

「魚を得て筌（せん）を忘れる」

「漁師が魚を捕った後、その魚を捕るために使った罠を持ち帰ることを忘れてしまった。」

資料⑦　田邊古邨著『書の基本』　用筆法について「注意事項十條」

第十条　すべての用筆法は習得した時をもって不用となる。いつまでも覚えていると、そのために不自由になる。

資料⑧　田邊古邨著『書について』　「書作と心」

「競書とか展覧会出品といふと、一種の競演だから他人とのせりあひになる。相撲や将棋のやうなはっきりした相手はないまでも、假想の相手をもって創作する。どの審査員が何點くれるだらうか、特選になるだろうか、この作品を他人はどう評価するだろうか、自分の拙さを隠しおほせるだらうか、この所を巧いと思ってくれるだらうか、といろいろ苦慮する。それは書作には絶對不要の邪念だとは知りつつ、それを拂拭できず、最も大事な感興を失っても、なほ假想の相手にかかずらって、あの手この手を考える。・・（中略）・・書作では、邪念の一掃ができるやうになれば五點の實力が十點に光る。邪念に妨害されれば十點の實力も五點に下がってしまふ。絶對に他を相手としてはいけない。筆を執る時には先づ心の中から他人を閉め出し、書そのものになり切って、運筆の感興に陶醉するようにならなければならぬ。書は技術以上に心術において悟入するところが

なければならぬ。心の操縦をあやまると、一切の技術が無駄になる。」

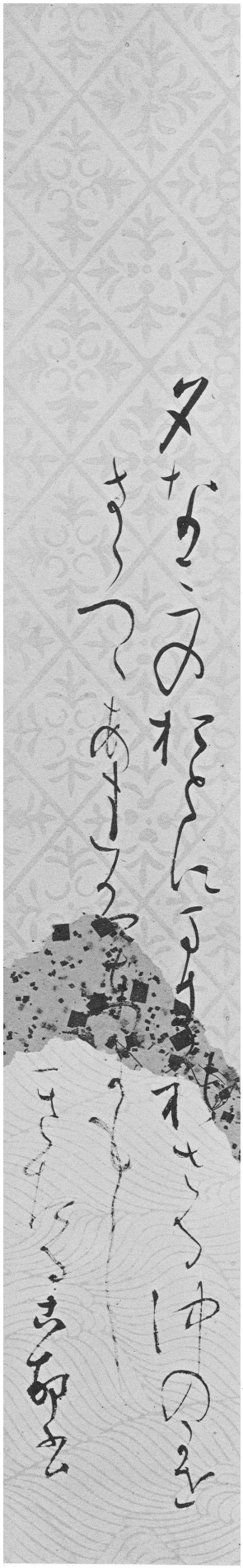
資料⑨　宮本武蔵著『五輪書』

「千日の稽古を鍛とし、万日を錬とす。」

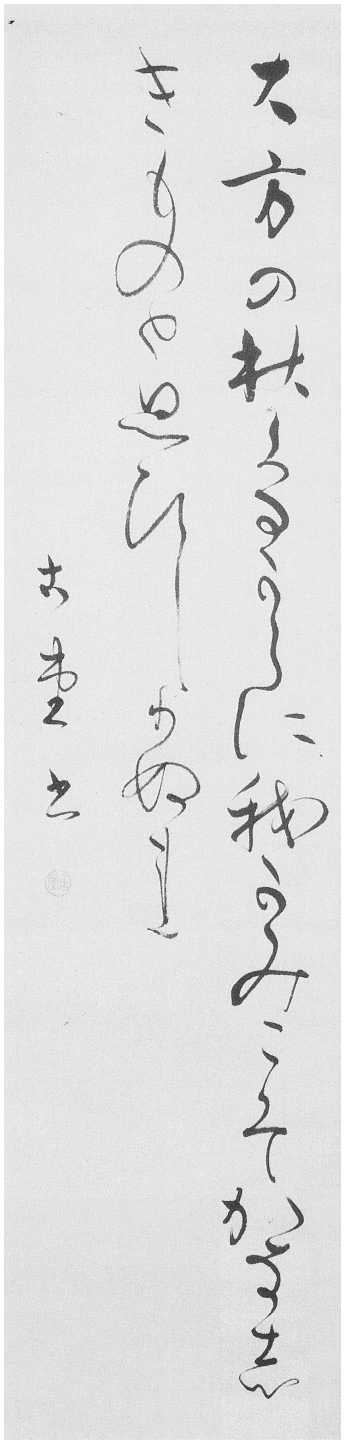
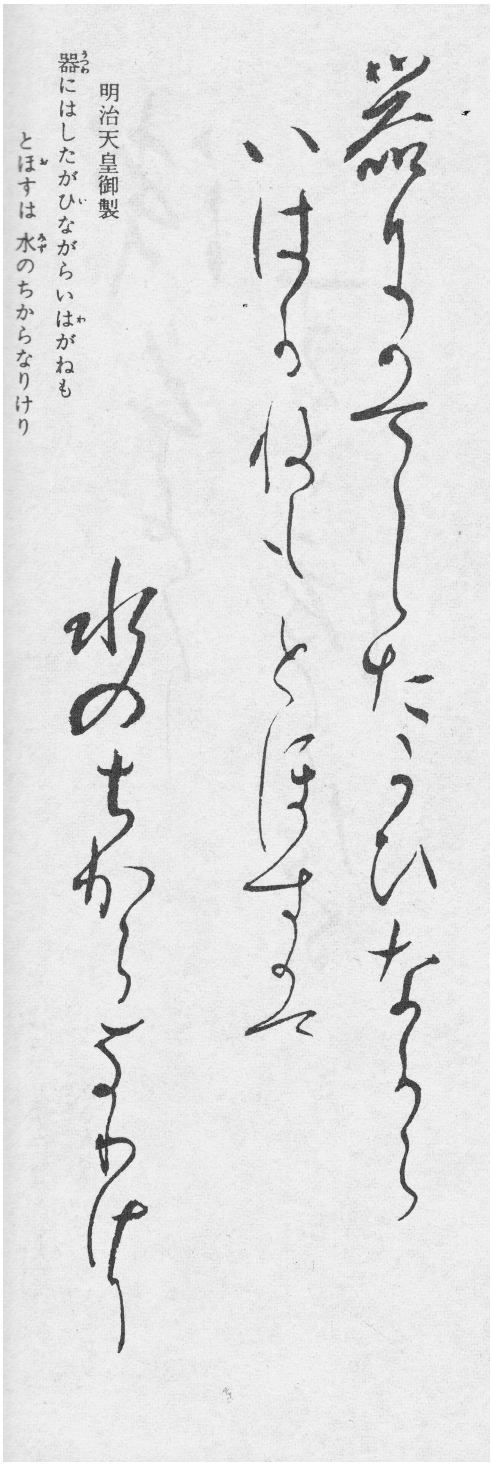
資料⑩　島木赤彦著『歌道小見』「古歌集と自己の個性」より

「私が万葉集及びその系統を引いている諸歌集に親しむことが大切であると言うのに対して、世間往々反対の説をなすものがあります。歌は素（も）と作者自身の感情を三十一音の韻律として現すべきものである。それであるのに、千年以上も昔の歌集を読んで歌の道を修めよというのは、生き生きした現代人の心を殺して、千年前の人心に屈服せしめようとするものであって少くも現代人の個性は現れるはずがないというのであります。この説一通り御尤もでありますが、人間の根本所に徹して考えた詞でありません。歌には歌の大道がある。その大道の由って来る所に拝礼するのは、自分の今踏まんとする大道を拝礼することであり、自分の踏まんとする大道を拝礼することは、自分の個性を尊重する所以になるのであります。仏教の真の行者は皆、己れを空しくして釈尊の前に礼拝します。己れを空しくし、いよいよ空しくして、一向専念仏に仕える行者にして、初めて、真の個性を発現させることが出来ます。法然、親鸞、道元、日蓮の徒皆この類でありましょう。この消息に徹せずして、今人説く所の個性は、多く目前の小我でありまして、有るも無きもよく、無ければなおよいほどの個性であります。これを歌の上で言えば、正岡子規であります。子規は、歌の上で絶対に万葉集を尊信しました。万葉集を尊信した子規の歌が、古人に屈服して個性を滅却しておわっているかどうかということは、子規の歌を見て分かりましょう。・・・（中略）・・・私が万葉尊信を言うを見て、個性滅却の言となすものも往々あるようであります故、一言の弁解をして置くのであります。」

資料⑪　田邉古邨書　昭和十六年　夕波の音にまぎれざる沖つ風　聞きつつあればとよもし来る　赤彦歌　古邨遺作集より



資料⑫　山口古堂書　昭和二十二年　大方の秋くるからに我かみこそ　かなしきものと思ひしりぬれ　古堂遺作集より



資料⑬　高塚竹堂書　『美しいかな』野ばら社より